

広報 あさま 第111号

佐久市岩村田 1862 番地 1 浅間総合病院広報委員会

URL <http://www.asamaghp.jp/> E-mail : info@asamaghp.jp



浅間総合病院開設者 柳田清二市長就任式

浅間総合病院の理念

患者さん中心の、
患者さんのための、
良質な医療の実践

目次

院長あいさつ・・・	・・・	1 P
新任医師の紹介・・・	・・・	2 P
「癒しの研修病院」を目指して・・・	・・・	3 P
研修医の紹介・・・	・・・	4 P
浅間病院 OSCE		
2009-2を終えて・・・	・・・	7 P
医療安全管理室の紹介・・・	・・・	8 P
吉沢國雄先生を偲ぶ会・・・	・・・	9 P
お知らせ・・・	・・・	9 P
連続講演会のご案内・・・	・・・	10 P
外来診療体制表	・・・	11 P

院長 あいさつ

院長 北原 信三



今年の冬は異常ともいえる暖冬で、春の到来が早く3月中には桜が咲いてしまうのではないかと恐れましたが、天も考えたのでしよう。少し手前で足踏みさせているうちに新しい年度がやってきました。

今年度はまず5期20年にわたり市長を務め、当院の開設者であった三浦市長が勇退しました。長年の病院運営へのご理解、ご指導、ご鞭撻に厚く感謝いたします。病院人事も大きく変わりました。佐々木茂夫事務長が本庁の総務部長に栄転となりました。医療崩壊が危惧される中、

病院建設、医師・医療従事者不足対策、佐久総合病院再構築問題、浅間病院の改革プラン作成など難問山積みの病院運営をよくりードしてこられました。市の総務部長として大いにその能力を発揮し、花道を飾っていただきたいと願っております。心よりお礼申し上げます。

一方、新しく小林正衛事務長を迎えました。小林新事務長は、市の企画課長を務め、佐々木前事務長と共に浅間病院の改革プラン作成にかかわり、佐久総合病院再構築問題の最前線で実務に携わった逸材です。ますます課題の増える地域医療のなかにあつて病院の舵取りに大いなる力を発揮していただきたいと思っております。職員の皆様のご協力をお願いいたします。

このほか多くの職員が異動で病院を離れましたが、新しく着任した職員の皆さんも早く慣れ

て病院発展に貢献して欲しいと願っております。

さて、なかなか医師をはじめとする医療従事者の確保は難しいですが、総合診療科として若い医師や研修医の指導・相談にあたっていただけの医師が確保でき、当院で研修を終えた医師が継続して、あるいは当院にもどってきて勤務するケースが出てきたことは病院の将来にとって明るい出来事と期待しています。東大からの研修医も1名が延長して当院での研修を希望し、さらに新しい研修医を4名迎えることができました。歯科研修医も新しく1名迎え、若い力が満ちてきて当院にもようやく春が訪れたかと期待に胸がときめきます。



市との連携の下「子育て医療」を推進するため当院としても産婦人科医師確保に力を入れてきましたが、4月から6人体制をとることができました。しかし、地域の分娩を担ってきた病院の一角が崩れ、地域としての分娩は依然として危機状態にあることに変わりはありません。安全で効率よく周産期医療を行うためには助産師もまだまだ必要ですし、小児科医も足りません。せっかく産婦人科医師の数は増えても手放して喜べるわけではありません。医師と医師、医師と助産師の連携・協力態勢をしつかり築いて欲しいと願っております。助産師に関しては、佐久大学と連携の下当院の助産師が佐久大学教員になり、看護師1名が助産師養成課程（別科助産専攻）に推薦入学できたことは今後いつか花開く結果となることと期待しています。

新任医師の紹介①

総合診療科

高濱 充貴 先生



佐久医師会との「休日小児急病診療」構想も当院を設置場所とした地域連携の一つとして進められてきましたが、今年度中に稼働できる見通しとなりまして。各方面の方々の努力に感謝申し上げますとともに、さらに一歩進めるきっかけがつかめればと考えております。

佐久総合病院の再構築問題は、県・市・厚生連の間の3者会談で、知事より裁定案が示され方性が定まりました。当院としては、新しい情勢をにらみながら地域の医療機関とのより綿密な連携を模索し築かねばなりません。市民の病院としての浅間病院の存在に住民の理解・支持が得られるよう常に努力を惜しんでなりません。

よろしくご協力をお願いいたします。

この度、臨床研修指導医として浅間総合病院に赴任いたしました。

新臨床研修制度に伴って、この浅間総合病院においても大学病院からの若手医師の引き上げや複数医師の退職などがあり、内科は一時かなりの医師不足に陥ってしまいました。そしてベテラン医師にかなりの負担がかかります。研修医の指導まで手が回らないという状況になってしまいました。

若手医師は向上心、やる気に満ちていると同時に責任や不安

と戦わなければなりません。

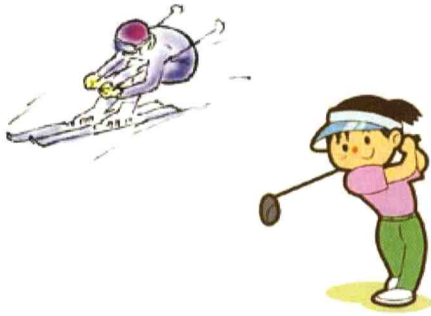
そこで、若手医師の責任や不安を緩和して、やる気を伸ばしていく。結果としてベテラン医師の負担を取り除く。それが当面の私の役割だと思っています。西のほうでは年収3000万円やるから365日がんばれ。という病院も出現しましたが、それでは医師は根付かないのではないかと思います。責任や負担を分散して、皆で協力して診療にあたり、やりたいことを伸ばしていける。仕事以外のことも楽しみ、自分の心が満たされれば患者さんにも思いやりを持つて接することができる。そう思っています。



佐久という土地は東京へのアクセスもよく、近くに軽井沢をはじめとしたリゾートもあり、ゴルフ、スキーなどのレクリエーションも豊富で立地条件はすでに満たされています。病院の設備も新しくなったばかりで文句なしです。あとは医師が働きたいと思う環境だけです。「ひとたび歯車が回り始めれば後はひとりでも回ってくれる。初めの歯車を回してほしい。」そう院長先生に言われ、「そんな大きな歯車、自分でも動くなら試しにまわしてみようか。」と思いました。その結果とは直接関係ありませんが、マッチング制度で研修に来た先生が大学に戻るはずのプログラムを変更して浅間病院にとどまってくれることになりました。浅間病院研修プログラムの卒業生も2名後期研修医として残ってくれます。そして、二年前に研修に来ていた先生も後

期研修医として再び浅間病院へ戻ってきてくれました。さらに4月からは新たに研修医の先生が4名就職しました。研修医、後期研修医あわせて8人の大増員です。

私が回すより先にすでに歯車は回り始めています。あとは歯車の動きを止めないように周りの浅間病院という大きな歯車が順調に回っていくように日々努力をしていきたいと思えます。



「癒しの研修病院」を
目指して
診療部長
村島 隆太郎

平成16年度に始まった新臨床研修制度は日本中の病院に大きな影響を及ぼしました。それまでは研修医の7割が大学病院で、3割が臨床研修病院で研修を実施しており、研修医の4割は出身大学(医局)関連の単一診療科によるストレート方式による研修を受けており、幅広い診療能力が身につけられる総合診療方式(スーパーローテート)による研修を受けている研修医は少数でした。地域医療との接点が少ない、専門の診療科に偏った研修が行われ、処遇が十分でアルバイトをせざるを得ず、研修に専念できない状況でした。新臨床研修制度はプライマ

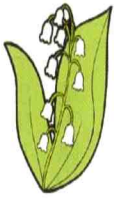
リ・ケアの基本的な診療能力を習得するとともに、アルバイトをせずに研修に専念できる環境を整備するということが構築されましたが、都会の一部の臨床研修病院や大学病院での研修希望が多かったため、最初の2年間は大学病院の医局入局者がほとんどいないため、医師不足に陥った大学病院の医局は大学院での医療・研究・教育を守るため派遣先病院からの医師の引き上げを始めました。これが地方病院の医師不足を引き起こしました。医療事故で訴訟されることの多い産科医・小児科医などの希望者が減ったこともあって、医師不足が現場の過重労働を生み、ますます現場から医師が離れていくという悪循環に陥りました。

浅間病院も例外ではありません。内科医不足は切実な問題で、募集してやっと来てもらった医師もこんなはずではなかったと、辞めていく状態でした。こんなことを繰り返している中で、病院に希望を与えてくれたのは若い力でした。東京大学病院の研修2年間のうちの1年を当院でおこなうたすき掛け方式に登録し、また当院独自の臨床研修をおこなうことによって、若い研修医が集まり、当院に残って働いてくれる医師たちが出てきました。「浅間病院をどげんかせんといかん」と思ってくれているのか、その働きぶりには頭が下がる思いです。

この若い力に答えるために、魅力ある臨床研修をおこないたいと考え、今年1月より専任研修指導医として総合診療科の高濱充貴先生に来てもらいました。もともと当院は総合医局に医師が集まっており、各科の壁が少なく、他科への依頼もしやすい病院でしたので、医局で質問

されれば、各科医師が説明・指導できましたが、内科医が少なかったため、研修医が内科研修しているときの指導が手薄でした。高濱先生に専任研修指導医になってもらうことにより、内科研修を充実させたいと考えています。臨床現場、CPCのプレゼンテーション、医局勉強会などで厳しく優しい指導で有意義な研修を送ってもらえるようにしていきたい。勿論、診療部だけでは研修は成り立ちません。病院全体で研修医をバックアップしてもらえようをお願い致します。地域住民に信頼される医師を育てたいと思います。

放流した稚魚が成魚となって故郷の川に戻ってくるのを夢見ながら 2009年春



研修医の紹介①

和氣 泰次郎 先生



佐久市の皆さん、はじめまして。今年から研修医2年目となる和氣です。医師を目指すのは卒後医師免許を取得したのち2年間の研修が義務づけられています。現在私はその期間の中で、新鮮な日を送ると同時に新しい環境になじんでいる毎日です。

浅間病院を希望した理由は多々ありますが、諸先輩医方の温かい助言と私自身の余裕を持って研修に取り組みたい気持ちが強かったからでしょう。考えてみれば昨年の研修1年目はドタバタの連続でした。不慣れの

仕事、人間関係、事務手続き、科をかわるごとの引き継ぎ：自分が一杯一杯でも時間は進んでいくのです。大変でしたがその1年を乗り越えたことは私にとって大きな自信になりました。

佐久市に住んで現在1週間ほど経ちますが病院研修、先輩医、町、人々、風景にとっても満足しています。自分には2年目として1年目とはまた違った目標があります。すなわち必修としてある小児科、産婦人科、精神科、及び1年目では経験できなかった耳鼻科、皮膚科、整形外科など分野において一般診療および治療手段についてイメージできるようにすること、そして自分が心底やりたいと思ったことをこの2年間の研修中に見つけること。

まだまだ学ぶことは多いと思います。ですが佐久市に来たかにはその土地の素晴らしさを

知りつつ、苦労はもちろんです。が楽しく研修していこうと思っています。楽しみこそが長続きの秘訣ですからね。

研修医の紹介②

植村 健司 先生



皆様はじめまして。4月より研修医2年目として浅間総合病院にてお世話になることになりました植村健司(うえむらたけし)と申します。

